

# 弥生時代の倭・韓交渉

## 倭製青銅器の韓への移出

Relations between Wa and Korea in the Yayoi Period:  
The Transfer of Bronze Implements Made in Japan to Korea

後藤 直

GOTO Tadashi

序

① 韓地域出土倭製品の認定

② 時期

③ 倭製青銅器の扱いと倭・韓交渉

### 【論文要旨】

弥生時代中期後半、すなわち朝鮮半島の無文土器時代末以降、倭の北部九州で製作した長大な青銅武器（矛、戈）と小形倭製鏡が韓地域（朝鮮半島南部）に移出され、最有力者の墓に副葬されている。これが当時の倭と韓の間のどのような関係・背景のもとで行われたかが主題である。

韓出土の長大化した青銅武器と小形倭製鏡には、これまで倭製ではなく韓製と考えられてきたものがある。長さを増した細形銅矛と中細形銅戈、初期の小形倭製鏡がそれである。まずこれらが倭製か韓製であるかを検討する。

青銅武器の長大化・大形化は倭社会に特有の青銅武器の使用目的（共同儀礼の中心的儀器）にもとづく儀器化であり、鏡（漢鏡・小形倭製鏡）も大きさや数量が社会関係・地域関係を支える大きな役割を果たす。これに対し韓社会では青銅武器も鏡も有力者の地位・権限の象徴物として用いられていて、武器の長大化と漢鏡倭製の必要はない。小形倭製鏡は倭では原鏡に最も近いものから継続して文様帯が変化しているが、韓出土鏡は最初期からやや遅れる倭製鏡からである。したがって長大な細形銅矛（および中細形以降の銅矛・銅戈）、小形倭製鏡のすべては倭で製作されたと考える。

これらは倭における用法、配布の論理に従って、韓へ移出され有力者に贈与されたが、韓では自らの方法によって副葬した。移出目的は倭と韓の交渉・交易を維持発展させることであった。とくに鉄器、鉄素材の入手を目的に、鉄・鉄器生産に力ある有力者に贈られ、韓の論理に従って有力者の保有物として副葬された。

【キーワード】 弥生時代、原三国時代、長大な青銅武器、小形倭製鏡